

いつもイワナにあえる川づくり

栃木県日光市　ニッコウイワナに学ぶ会



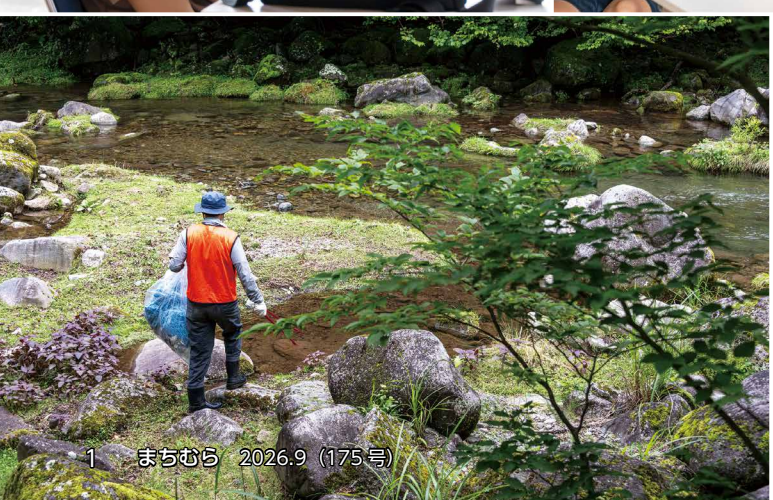

日光市民活動支援センター
日光市歴史民俗資料館
二宮尊徳記念館




No Charr
No Nikko

















中禅寺湖から華厳の滝や神橋といった名所を流れる大谷川。ここの川に生息する日光市の魚である「ニッコウイワナ」は近年、生息環境の悪化や乱獲などにより減少し、生息域は以前の約10分の1にまで縮小している。2019年から活動する「ニッコウイワナに学ぶ会」（代表：道田豊さん）は、イワナを通して子どもたちの環境学習と地域ぐるみの川づくりに取り組んでいる。

8月中旬、日光市内の中高生3人が、ニッコウイワナに学ぶ会の活動に参加した。日光市と日光市民活動センターが主催する「中高生ボランティア体験事業」の一環として開かれ、イワナのすみかづくりや河川清掃活動を行うもの。折しも前日の大雨により大谷川が増水していたため、急遽、室内での座学や体験学習に変更し、大谷川とイワナについて学ぶことになった。参加者は市内の中高生3人をはじめ、日光砂防事務所、日光市役所、鬼怒川漁業協同組合日光支部の関係者も集まった。

講師を務めるのは、同会員の宮本幸太さん。冒頭で「今日のお話を家族や周りの人に伝えてもらうことも、大切なボランティアになります」と呼びかける。

講座では、ニッコウイワナが冷たくきれいな川や湖を好み、倒木や岩などの隠れ場所がある環境で暮らしていることや、一方で、土砂の堆積などによってイワナの生息場所が減少している現状が話された。そこで、河川にたまった土砂をセメントに混ぜて石を作り、間伐材と組み合わせてイワナの隠れ家にする取り組みも説明された。

続けて、青いシートを川に見立てて実物大のイワナの写真を並べた、イワナの模型釣りに挑戦した。最初は制限を設けずみんなで釣りあげたところ、一番釣りあげた参加者には「イワナ王」の称号をプレゼント。ところが、川にはイワナは1匹も残っていない。宮本さんは「イワナ王は没収です！」として、「全長15センチ以下は捕獲しない」「禁漁区を守る」「遊漁券を購入する」といったルールを説明する。ルー











ルを守って再挑戦すると、３００匹のうち釣られた魚は78匹にとどまった。釣りのルールを守ることが、川に魚を残し、次の世代へ命をつなぐことにつながると、参加者は体験を通じて学んだ。

参加した中高生は、「実際に川に行って、15センチ以下を取らないルールを守って釣りをして、みんなに広めたい」「イワナの生息環境や、川の土砂を活用する方法が印象に残った。河川にごみを捨てない大切さを再認識した。周囲の人にも呼びかけたい」など、自然への意識を高めるまたとない機会となったようだ。

午後は、同会のメンバーで大谷川の上流に向かった。いろは坂付近の河川敷に降りると、弁当の容器やペットボトル、菓子袋、Tシャツまで捨てられており、清流を目前にした状況に心が痛む。メンバーは次々とごみを拾いあげ、瞬く間にごみ袋3つ分を回収した。

次に、堰堤の建設や川岸のコンクリート護岸化によってイワナの隠れ場所が失われた場所に、新たなすみかとなる隠れ家を設置した。さらに、イワナがどのくらい生息しているのかを調べるため、実際に魚を捕まえて確認する調査も行った。ニッコウイワナの鮮やかな模様を目の当たりにし、ヤマメとの見分け方も教わりながら、川の環境を守る活動が、命を育んでいることを実感する。

活動の背景について宮本さんは、「子どもたちが川を知る機会が少なくなっている。身近にイワナが暮らせる川があるのに、故郷の自然の豊かさを知らないのはもったいない」と危機感を持っていたと話す。

活動は、小学校で釣りのルールを教える授業から始まった。すると、子どもたちから「イワナを見たい」と声が上がり、学校の廊下に水槽を置いて飼育したり、家庭ではペットボトルに入れた卵のふ化観察もはじめた。卵の中で心臓が動く様子を見守り、家族で命の大切さを共有する機会と













なった。さらに子どもたちから「イワナが減った原因を知りたい」という声があがり、大谷川を調べてみると、コンクリート護岸では魚が隠れる場所が少ないことが分かり、河川に堆積した土砂と間伐材を活用した、イワナの隠れ家をつくる活動をはじめ、子どもたちは大人と協力しながら作業を進めた。

こうした小学校との連携をきっかけに活動は地域全体に広がり、市内の行政や企業、研究機関などが協力し、それぞれの専門性を活かした学習プログラムを行い、地域の川を学ぶ仕組みが生まれている。また、魚の生息環境に配慮した石組み（バーブ工）が設置され、行政、研究者、市民が協働して河川整備を進めるなど、大谷川の環境改善に向けた取り組みが具体的な形となっている。

道田さんは「地域の自然や魚、川の特徴を知ることが、日光への愛着にもつながる」と話す。大谷川に暮らすイワナを守ることは、日光の自然を守ることでもある。最近では資源回復のために釣ったイワナを逃がしたという話や、魚が増えてきたという声を聞くようになり、活動への理解が広がっていることも実感している。

宮本さんは「子どもたちに川と魚の現状を知ってもらい、発信していくことが、地域で川を良くしていくときに大きな力になる」ことを挙げる。これまでの活動経験から、「市民自らの手で川の環境を改善し、維持管理していくという考え方をもっと広めたい。地域の人々が主体となって、より良い川をつくり、守っていく流れが生まれれば」と、地域の力に期待を寄せる。

かわいらしく、どこか愛嬌のある姿のイワナ。ニッコウイワナに学ぶ会の活動とともに、地域の人と人、人と自然をつないでいく存在として、これからも愛され続けていくことと思う。

【連絡先】ニッコウイワナに学ぶ会
メール：nikkocharr@gmail.com